
同窓会

早川由香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Nコード】

N8133H

【作者名】

早川由香

【あらすじ】

5年ぶりの高校の同窓会にはりきってぶりっ子しながら行く主人公こと私。昔の仲間と好きだった人と繰り広げる楽しい一夜。私は大人らしくしつとりとした同窓会を期待するが・・・。

上（前書き）

長年の夢だった小説を書いてみました。僭越ながら自分の文章力を一度知りたいので、もしよろしければ評価していただきたいです。

稚拙な文章ですが読んでいただけると幸いです。

同窓会

暑い。体に湿気がまとわりつく。汗が背中をすーっと流れるのを感じる。夏、私は自主的にはほとんど外に出ない。引きこもりのような生活を送っている。運動なんかもつての他だ。外に出たとしてもクーラーが効いているむしろ寒いぐらいの百貨店やらレストランにしか行かない。その反動だろうか、ちよつと外に出るだけで、汗がぶわつと体中から噴き出す。気合入れた化粧も汗で流れているだろう。

待ち合わせの時間にはまだ10分ある。親友であり今回の同窓会の幹事である山本結衣子（通称 ゆっこ）と化粧室へ向かう。汗取りシートで全身を拭いた後、鏡を見ながら最終チェック。何しろ5年ぶりに会うメンバーだ。第一印象だけでも可愛く見せたい。

「あれ？あいつ、あんなにきれいだったっけ……。」
とか思われたりして。高校生とは違う大人な雰囲気ですぐ近況報告しながら思い出話に花を咲かせる。そんな期待を抱きつつ待ち合わせ場所へ戻る。

5年ぶりのメンバー。口コミで広がったことと急な日取りのせいもあって集まりが悪く12人の少数性同窓会となった。女子は必然的に幹事であるゆっこと仲の良いメンバーしか集まらず、私、早瀬花梨、松下貴恵の4人のみ。気になる男子は……どんなルートで連絡が回って来たのか知らないが、申し訳ないが普段思い出しもしない顔がほとんどだった。それもそのはずで、高校3年間クラスがほとんど被ったことがない人が多い。記憶を辿りながら名前と顔を一致させる。そして、心の中で今日の目標を立てる。

盛り上げは人に任せて、今日はおとなしく！へまをせず好印象で新

しい交流を深めるのだ！大人しい子がモテるのが合コンの定石！（と、どこかに書いてあった。）
と、胸に誓い、いざ会場の居酒屋へ。こうして同窓会は始まった。

個室の円卓を皆で囲み、特に懐かしくも何も無いねー。しょっちゅう会ってるもんね。なんて笑いながら女子4人揃って並ぶ。男子は、お互い久しぶりのメンバーが多かったようできこちない近況報告がそこらかしこで始まる。

「山本がM1目指すために大学やめたらしいぞ。」

「有田は一流商社に入社したらしい。東大だもんねー。」

「お前は？」

「一流電気会社！」

「早瀬はばつちりメイクでOL中？」

「病院で勤務中。リハビリしてます。マッサージなら任せてね。」
と、しなを作りながら早瀬。

「ていうか俺、まだ学生！」

「そういえば、学生してるやつも多いよな。出口は学生？？医学部は6年性だもんね。」

「おおつ、そういえば俺らの中、医者も歯医者もいるな！将来安心だな。」

なんて話を相槌をうちながら聞いていると、

「そういえば、広田も医学部だっけ？」

いきなり話を振られた私こと広田。

「うんうん。医学部だから後1年ちよつと学生。」

私達は県下では名の知れた進学校の出身だったので、東大、京大に始まり、名門大学に入る子が多かった。ゆっこも一流企業のOL、早瀬も病院で勤務、貴恵は大学院で研究中と、優秀な仲間であった。男子も有名企業に入社した子が多かったことが今分かった。もちろん留年や浪人でまだ学生をしている子もいるが。

話は高校時代の馬鹿な思い出話に変わっていき盛り上がってきた。

話し上手な男子が女子サイドにも上手に話を振ってくれた。そんな
気配りが、ああ皆大人になったなあ、見かけもちよつとかつこ良
なってるし、ビールの飲み方一つとっても様になってる。一人感慨
にふけていた。

「そういえば、俺らもう23なのに誰も結婚とかしたりしてないわ
け？」

と、谷山君。そういえば誰も結婚してないよな、噂も回って来てな
いよね、あちこちでそんな声が聞こえる。

「由美、もう彼と付き合つて長いよね。何年目？」

と貴恵が私を見ながら尋ねる。3年半？ん？あつてよね？と心の中
で一瞬計算。

「3年半かな。もう大分長いなあ……。」

「さすが！付き合つたら長いなあ。」

富森君が感心したように呟く。当時付き合っていた高森とのことを
言っているのだろう。確か彼とは4年半付き合つて、振られた。そ
の一週間後、今の彼氏と付き合い、今に至る。

「絶対、今回は結婚する！逃がさない！」

と、冗談めかして言ってみる。

「まだ、貢がせてるんだろー？俺はお前は金のかかる女だと高校の
頃から思ってた！」

と、宮元。ちよ、ちよつと、何てこと言うのよ！今日はおとなしく
可愛い女を演じて帰るつもりなのよ？皆、笑わないで！早瀬もその
ニヤニヤやめる！

「そんなことないよ。」と可愛く応戦。

「いや、お前は怖い女だよ……。」

「広田の彼氏ってどんな人？」

即、早瀬が

「同じ医学部の人で、親も医者！車、下宿持ちのカネモ！！」

おいっ！敵は味方にいたか。

「そりゃ、逃がしたくないよな。」

「必死だな、広田！」恋愛はネタはいくつになっても盛り上がる。いやいや、超が付くほどのドケチだし車も中古だよ、付け足したフオローもむなしく爆笑が広がる。開始たった一時間後の嫌な流れに失望する。

「違うからー！宮元黙れ！」

と、叫んでトイレに逃げ込む。宮元のヤツー！と思いつながら、汗を拭く。くそっ！当初の計画が早くも台無しに……。皆、あんまり変わってないな。そう言えば、昔から宮元とはこんな感じだったっけ。私はよく喋るせいか昔からかわれることが多い。高校の頃から盛り上げて馬鹿騒ぎをしていた。どうしよう、盛り上げ役に回るか、それとも大人しくしているか、方向性を模索しながら化粧室から出る。席へ戻るときに宮元をチラッと睨みつけた。

「宮元の彼女はすげー可愛くていい子で羨ましい！」

恋愛ネタがまだ続いているようで、宮元と同じ大学の谷山君が宮元の彼女事情を暴露しているところだった。へ〜。と思いつつ、いい年なんだし彼女くらいいるよなあ、ていうか、私も彼氏くらいいるし。と何故か自分を納得させる。

宮元とは3年間同じクラスの腐れ縁だ。高森とも仲がよく、遊びに行ったことも何回かある仲だったが、大学生になってからは疎遠になっていった。会うのは久しぶりだ。実は昔好きだった。報われることはなかったが、もちろん彼氏がいたので気持ちを吐露するつもりはなかったし本気で好きかどうかも分からなかった。淡い恋心つてやつだ。後になって聞いた話だが宮元も私のことが気になっていたらしい。本人から言われたわけでもないのだから本当かどうか確かめる間も機会もなく気づいたら宮元も誰かと付き合っており、そのまま友達として卒業。そんなことが少し思い出される。今の今まで、宮元のことなんか思い出しもしなかったのに現金なものである。

料理がどんどん運ばれてくる。口が汚れる、口紅が落ちる、ガツガツ食べれないのが女子の常である。料理はそこそこにして話に耳を傾け相槌を打つ。無茶な飲みも強要されず、そこそこ盛り上がり

皆ほろ酔い気分で良い飲み会である。

「は〜い！ここで一次会はお開きです！二次会行く人、手挙げて！」

と、幹事らしくゆっこ。はいっ！はいはい、と皆ノリが良い。まだ9時だ。全員揃って二次会のカラオケへ移動。店の玄関先で宮元が貴恵と楽しそうに話しているのが見えた。ズキッと胸が。何だ、この感じは。

「では、カラオケに行きます！付いてきてくださいね。」とゆっこ。ゆっここの後を歩き出す。外に出た途端、湿気がまとわりつく。汗が一気に吹き出る。夏はまだまだ終わる気配を見せない。いつの間にもやら宮元が横に。汗臭くないかしら、と少し気にする。

「どこのカラオケ行くのかな。」

「そこに、カラオケなかった？ほら、昔お前と、高森と岩崎の4人で行ったじゃん。覚えてる？」

「あ〜！そういえば行った行った！宮元が1000点満点中40点だったとこだよね。」

「お前なー、何でそんなこと覚えてるかな…。お前だって、（
当時人気だったアイドル）ノリノリで歌ってただろ！歌わせるぞ！」

「ちよっ！マジでやめてよね！さっきといい…。」
なんて軽口を叩きながら二人、列の最後尾を歩く。体が熱いのは夏のせいだ。しかし、5年ぶりに会ったのに、いや、会ったからこそだろうか、会話がはずむはずむ。期待していた大人っぽい会話にこそならなかったが、高校のときのまま脈絡のない、しょうもない話に笑い合う。時が立っても変わらない仲にほっとする。

宮元と話しながらカラオケボックスに入ったので席は隣同士になった。回りを見渡すと、女子と男子が交互に座っている。合コンのようだな、と思いつながら5年ぶりに会っても皆、すぐに馴染めていることに感心する。

「 広田の 歌聞きたい人！」

宮元の悪ノリが始まる。ハイッ、ハイッと全員の手が挙がる。

「やめてよー。もう、忘れてるって！歌えないって！」

悪あがきもむなしく、懐かしいイントロが流れる。画面には可愛いアイドルのPVが。ここで場をしらけさせる私ではない。ぶりっ子を捨てノリノリで歌う。ちなみに私は音痴だ。うう、恥ずかしい…。やっとの思いで歌い上げ、宮元にマイクを押し付け、今、はやりの人気グループの歌をお返しに歌わせる。

「 宮元がラブソングをあまく歌います！静かに聴いてあげて！」
宮元に頭をはたかれる。宮元の下手なラブソングをBGMに横の寺山君と近況報告をし合う。彼はミュージシャンになる夢を追っているらしい。そのせいで2留だけど、と自嘲気味に笑う。堅い職業に就く卒業生が多い中で彼のように夢を追い続けている人は珍しい。かく言う私も堅実な人生設計しか描けないし追いかけてい夢も持っていない。少し寺山君を羨ましく思う。色々な人生があるものだな。プロデビューできるといいね、と応援した。

宮元が歌い終わり、早瀬とゆっこにウケねらいではない可愛い曲をリクエストする。ああ、彼女達のような立ち位置に今日はいるつもりだったのに、と思うが、時すでに遅し。

「そういえば、宮元は今何してるの？」

茶化してばかりで肝心の近況を聞いていなかった。

「ん？一浪してるからまだ学生。大学院に行くつもりだから当分学生だな。」

「学生はこれから肩身狭くなってくるね。」

「早く社会に出なきゃな。お前も婚期を逃すなよ。」

余計なお世話である。宮元は彼女と結婚するつもりなのかな。どんな人だろう。気になる気になる。宮元がタイミング良く、

「広田の彼女ってどんなやつ？写メとかないの？」

あら、宮元もひよつとして気にしてくれてた？

「宮元の彼女も見たい！」

お互い携帯を交換して写メを見せ合う。

「ふ〜ん、誠実そうな人じゃん。こんないい人そんな人を騙すなんて悪い女だなー。」

谷山君が会話を聞きつけて、私の携帯を宮元からむしり取る。携帯が皆に回される。あちこちで、優しそう、いい人そうだね、広田が貢がせてる人か、かわいそうに、なんて勝手な声が聞こえる。かっこいいという声が聞こえず少しがっかりする。

「貢がせてない！ラブラブだもん〜。」

と、のろけてみせる。宮元お彼女は三つも年下なのに大人っぽくて綺麗だった。正直、負けた、と思った。

楽しい時間はすぐに終わる。私と早瀬は門限があるので3次会には名残惜しいが行かず帰ることにした。今度このメンバーに会えるのはいつになるのだろう。もう会えないかもしれない、と思うと急に寂しくなった。

一緒に勉強して大学に進んだ仲間だが今は皆別々の道を歩いている。皆、色々なことを経験して大人になりながら。高校生の頃よりは成長したな、と思う。一人前になったような顔をしていたあの頃が恥ずかしい。経験が知識を増やすのだと知った。成長しなければ分からないことも多いことも知った。これからも、年を重ねて初めて知ることだらけだろう。同じように迷って成長してきたメンバーがいることはとても心強かった。高校の頃に戻ったようにお喋りをしていても中身は大きく違っている。また会えるとき恥じないように成長していきたいな、この場所に来てよかったと思った。

再会を誓って別れる。宮元とも当分会えないな、と思っていると、
「俺も彼女が待っているから帰ります！今日はありがとう。また会おうな。」

と、宮元の大きな声が響く。心の中でやった、と呟く。三人で居心地のよかった場所に背を向けていつもの日常に向かって歩き出す。早瀬とも途中で別れて二人きりになる。

繁華街なので深夜前でも街は明るくにぎやかだ。少々うるさいくらいだ。静かでなくてよかった。余計、ドキドキしてしまう。

「今日、本当はもう少し人数多かつたらいいな。俺も有田と一緒に行くつもりだったのにドタキャンされた。」

「あゝそういえば、高森も来るとかゆっこが言ってたなあ。」

「その名前は禁句じゃねえの?!」

私がさらっと口にした元彼の名に私の様子を伺うように宮元が尋ねる。

「振られたからあんな人、嫌い。」
むくれる。

「いや、でも俺は五分五分くらいで両方悪いと思ったよ。」

笑いながら宮元。

「うん。私も悪いと思ったからこないだ会ったとき謝った。初めて素直に謝れたよ。」

「偉いじゃん。貢がせてすみません、とか？」

まあ、二人の事情は二人にしか分からないしな。回りには絶対分らないよな。」

なんだか意味深だな。

「色々あるよね、失恋はしんどいよね。」

野暮なことは聞かず二人しんみりしながら切符を買った。

「宮元、どこで降りるの？」

「駅。お前は**駅だったよな、確か。」

覚えててくれたんだ、嬉しくなる。一緒にいられるのは後四駅か。楽駆った分、別れが辛くなる。

「今日は盛り上がったな。親しいやつが少なかったからどうなることかと思っただけなんだ。広田がいてくれてよかったよ。」

「ふん。久しぶりに会うだけで結構盛り上がるものだね。」

言ってから、もつと素直に、私も宮元と会えて嬉しかったとか、何で言えないかな、と後悔した。私の駅に着く。

「じゃあ、バイバイ。またいつか、かな。」

「おう。たまにはこっちの方にも遊びにこいよ。何でもおごってやるぞ。」

「ほんと?! フランス料理でもおごってもらおうかな。」

「金、無い。」

「じゃ、またね。」

「おう、また。」

一回振り返って微笑んで別れる。もしかして誘ってくれたのかな、茶化したことをまたもや後悔。まだまだだ。これからもっと上手に振舞えるようになるのかな。なんて思いながら一人になった家路を急ぐ。何年後かに宮元に会ったら素直に話せるようになったらいいな。

メールが鳴る。彼氏かな、宮元にときめいてしまった分、少し罪悪感が生まれる。宮元からだった。ん? 何で?

「俺の連絡先、幹事の山本にメールしといて。メアド聞かれたのに言うの忘れてた。」

そういえば、広田の誕生日三日前だよな。おめでとう。お互い頑張ろう。」

あら、誕生日まで覚えててくれたの。二日前だけど。でも嬉しい。「分かった。ありがとう。宮元も一週間くらい前誕生日だったよね。おめでとう。」

また、そっちに遊びに行く。おごってね。」

短いメールを2、3回して終える。今度こそ本当にさよならだ。

宮元のことを好きなのだろうか。好きだなあ、と思う。ただ、付き合おうとか男女の関係には絶対にならないだろう。これからも。宮元とはまた会うだろう。同窓会とか、遊びに行ったりして。けれど、その時にもお互いの傍にはもっと大事な人がいるのだろう。それで良い気がする。友達と恋人の間とでも言えはいいのだろうか。響きはいいがとても中途半端だが気分は悪くない。新しい男女の関係があると知れたことも今日の収穫の一つである。こんな関係がいつでも続くといいな。そんなことを思いながら同窓会は幕を閉じた。

下（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

小説を書くのはとても難しいですね。

評価していただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8133h/>

同窓会

2010年10月28日07時28分発行